

広報

2022年
No.362

1/1・15

かみす

Pick up

▶市長・議長から
新年のごあいさつ

特集

まちの魅力再発見

社寺巡礼

地域で受け継ぐ悠久の歴史

いくつもの鳥居が立ち並ぶ八龍神社。境内に入ると空気が少しひんやりとします。参道の奥には陽の光が差し込む社殿。足元には誰かが丁寧に掃き清めた跡。地域で大切に受け継がれていることが伝わります。今回は私たちの身近にある、神社やお寺の由緒や伝説を紹介します。

AR

広報かみすが
動き出す



[COCOAR]

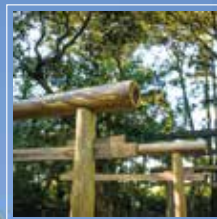
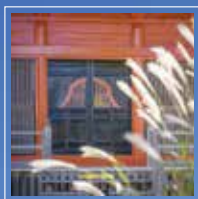


アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は16ページ

社寺巡礼

地域で受け継ぐ悠久の歴史

時を超えて大いなる恵みをもたらしてきた鹿島灘や利根川の大自然、常陸国風土記にも登場する悠久の歴史、何百年も前から受け継がれてきた伝統行事。そうした時の流れの延長線上に、今の神栖市があります。鹿島開発でまちの姿はすっかり変わりましたが、社寺の佇まいは昔のまま、人々のよりどころであり続けてきました。改めて身近な社寺に目を向けてみると、地域の財産ともいえる由緒や伝説、文化財の数々と出会うことができます。新しい年の始まり、今年の初詣は近くの社寺を訪ねてみませんか。





金色姫立像(星福寺内)

蚕^{さん}霊^{れい}神社



養蚕発祥の地と金色姫伝説

こんもりとした森に抱かれるように建つ蚕霊神社。かつては、養蚕に関わる人たちの信仰を集めていました。

この神社に伝わるのが「金色姫伝説」です。昔、天竺(今のインド)の金色姫が、継母によって国を追われ日川の地へ流れ着き、権太夫に救われました。姫は病死してしまいますが、その後、美しい繭となり、その糸を織る産業が各地に広まったとされています。のちに蚕霊神社は、蚕業の創始の象徴として建てられたと伝えられています。

神栖市歴史民俗資料館の資料によると、日川地区は6世紀中頃に金色姫がインドから養蚕を伝えた養蚕発祥の地とされています。神栖地区では明治の中頃から養蚕が盛んになり、昭和58年まで行なわれていました。金色姫伝説を持つ神社は県内に3カ所あり、「常陸国の三蚕神社」と呼ばれています。また、蚕霊神社に所縁のある星福寺には金色姫立像が安置されています。

【所在地 日川720】

とりまつり 西祭

鳥(鴨)を奉納するお祭りで、11月の最初の酉の日に行なわれます。西祭の儀式に詳しい保立健さんに話を聞きました。

「まず、前祝いとして七の膳の儀が行なわれます。これは膳の並べ方まで詳細に決まっています。その後、蚕霊神社に奉納し、宮渡し(かぼん)の儀に移ります。この儀式では下番(現在の当番)組、上番(次の当番)組それぞれの当番家、役員が三献の盃を酌み交わし、当番家を引き継ぎます。続いて宮送りの儀。下番組の当番家から上番組の当番家へ宮(小さな祠)が引き継がれ、一連の儀式が完了します。

宮を預かる当番家は、1年間『四つ足』の動物を食べない、という風習が残っています。これは継母に迫害された金色姫が四つ

足の動物に助けられた、という言い伝えによるものです。

西祭をはじめ、今まで継承してきたものを若い人に引き継いでもらいたいと願っています。」



七の膳の儀



宮送りの儀

おお とり 大鳥神社

【所在地：矢田部3092】

神輿がまちを練り歩く酉祭

波崎第二中学校のすぐ隣にある大鳥神社は、矢田部地域の守り神。創建は平安時代の天慶年間(938～947)とされています。通りからも古い歴史を感じさせる鳥居、狛犬、灯籠、拝殿などを見ることができます。

毎年11月23日に五穀豊穡を願って行なわれる「酉祭」は、市指定無形民俗文化財。これは、大鳥神社に祭られている鹿島明神と八幡宮の御宮を、旧当番家から新当番家へ運ぶ「宮遷しうつしの祭り」です。古式ゆかしい儀式の後、鳴り物と神輿がまちに繰り出し賑やかに練り歩きます。「とり」にまつわる祭礼であることから、昔は当番家では1年間、鶏肉や卵を食べない習わしがあったそうです。なお、酉祭は現在、矢田部3地区(西前宿、上中、東海)の当番制で行なわれています。



しょう ふく じ 正福寺

【所在地：矢田部2595】

仏像や曼荼羅など文化財の数々

正福寺は、下総(銚子市)の東光寺と関わりが深い寺院です。一説によると、天正18年(1590)に滅ばされた領主・鹿島政幹の家臣たち18人によって創建されたといわれています。昭和に入り、地域にあった満重寺、宝寿院、知足院などを合併し現在に至ります。

市指定文化財の仏像や絵画を多数所蔵し、本尊の木造大日如来座像は檜材の寄木造りで、室町時代末期の作と推定。阿弥陀堂には“子安の阿弥陀如来様”と呼ばれる木造阿弥陀如来座像、薬師堂には木造薬師三尊像が安置されています。また、「大日経」「金剛頂経」の二大密教経典で説かれる内容を図絵にした紙本両界曼荼羅(胎藏界・金剛界)も貴重なものです。鎌倉時代作と思われる非常に珍しい聖徳太子二才像もあります。

おとりの手掛け松 神之池に伝わる悲しい伝説

神之池が鹿島開発で埋め立てられる前は、現在の約7倍も大きく、三角形をしていました。奈良時代の『常陸国風土記』には、寒田沼さむたのぬまという名前で登場しています。この池にまつわる「おとりの手掛け松」という伝説があります。

神之池のほとりで、漁師の五郎兵衛と妻、娘のおとりが暮らしていました。ある不漁の年に五郎兵衛は、「魚がたくさん

とれたら、おおとりい(大鳥居)を差し上げます」と願掛けをしました。それから大漁が続きましたが、神之池の主と名乗る大蛇が現れ、娘のおとりを連れて行こうとしました。「おとりではなく大鳥居です」という五郎兵衛の言葉は聞き入れられず、嫌がるおとりがすがりついた松が「おとりの手掛け松」と呼ばれるようになりました。



八龍神社

【所在地：賀1841】

外浪逆浦に残る八龍伝説

息栖神社から北へ約2.1km、常陸利根川に近い静かな林の中に八龍神社がひっそりと建っています。木漏れ日の中に鳥居が立ち並び、その先に見えるのは丹塗りの社殿。小さいながら風格のある佇まいです。

創立は江戸時代の元禄元年(1688)4月、ご祭神はおおわたのかみ大海渡神。賀は古くから渡船場を中心に栄えた集落で、江戸時代には河岸があり高瀬舟で賑わいました。

この神社には「八龍伝説」が伝わります。弥平という豪商が外浪逆浦を船で渡っていたとき、海賊に襲われて船と命を奪われました。賀の岸に流れ着いた弥平の体は巨大な八頭の龍に姿を変え、この浦を航行する船を襲ったことから、村人が弥平の霊を慰めるため八龍神社を建てて船の安全を願ったという説もあります。

益田神社

【所在地：波崎3338】

230年以上続く優雅な獅子舞

鹿島灘と利根川に挟まれ刃先のように伸びた波崎地区で、神善寺のすぐ北に位置するのが益田神社です。祭神はおのおの大己貴命、推古天皇の時代(592～628)に建立されたとも伝わります。現社殿は宝暦2年(1752)に建てられ、その後屋根は昭和52年(1977)銅板に葺き替えられました。

毎年2月と9月の年2回、市指定無形民俗文化財の獅子舞が奉納されます。これは、天明3年(1783)に浅間山の大噴火でこの地まで火山灰が降り、それを神の怒りと恐れた住民が鎮めようとしたのが始まりとされ、江戸時代から230年以上も続いています。他ではあまり見られない、雌獅子による優雅な舞が特徴です。この獅子にかまれると縁起が良いといわれています。



地域の声 舍利鳴物保存会 田向昌史さん

保存会では、市指定無形民俗文化財に指定されている「益田神社獅子舞」を継承するために後継者を育成していますが、会員の減少や高齢化で難しい状況が続いています。代々受け継がれてきた大切な伝統文化であり、230年以上の長い歴史のある獅子舞を次世代に継承していきたいです。

年表	時代	年代	主なできごと
	縄文		奥野谷貝塚が作られる
		300ころ	賀、高浜などに集落がつけられる
	古墳	500ころ	日川、高浜などに古墳がつけられる
			金色姫がインドから養蚕を伝える
	飛鳥	592～628	益田神社が建立される
	奈良	715ころ	『常陸国風土記』が書かれる
	平安	807	息栖神社が日川から息栖へ移る
		938～947	大島神社が創建される

時代	年代	主なできごと
	平安	1162 このころ霞ヶ浦、利根川などに海夫が現れる
		1180 筒井淨妙が宇治橋の戦いで活躍する
	室町	1374 香取神宮が海夫注文を作る。市には13の津(港)があったことがわかる
	安土・桃山	1590 正福寺が創建される
		1631 幕府によって検地が行なわれ、19の村ができる
	江戸	1688 八龍神社が創立される
		1800 このころ東国三社詣が流行し、下利根地方に多くの人が訪れる

参考文献・資料

「神栖の歴史 普及版」(神栖町)、「文化財かみす」(神栖町教育委員会)、「波崎町史」『写真集 波崎町の歴史』(波崎町)、「波崎の文化財」(波崎町教育委員会)